

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	ミアヘルサ保育園
園名	ゆらりん東麻布

1 活動のテーマ

<テーマ>

感触・感覚

<テーマの設定理由>

散歩に出かけると、砂や葉を手に取り触ったり握ったりしている。製作では絵の具や様々な素材に触れることに興味を持ち、色や形が変化していく様子を楽しんでいる。運動遊びではバランスストーンの台に乗ってバランスをとる感覚や何かを足で踏むということに興味を持っている。以上の事から、感覚・感触遊びを積極的に取り入れたいと思いました。

2 活動スケジュール

- ① 寒天ゼリー・スポンジ・片栗粉・スライムなど様々な物を用意して感触遊びを楽しめるようにしていく。外でプールが出来ない為、室内でプールを広げてプールの中で全身を使って楽しめるような環境を作る。(春・夏)
- ② 足の裏の感覚を楽しみながら脳や運動機能の発達に繋がられるよう、室内にセンサーパズルマットや感触ディスクを準備する。(秋・冬)

3 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

【素材・道具】寒天ゼリー・スポンジ・小麦粉・片栗粉・スライム・感触マット・ビニールプール・氷・花紙・絵具・食紅

【環境設定】

- ・怖がる児には保育者が一緒に寄り添いながら楽しめるようにしていった。
- ・探究心を尊重し、見守る姿勢や共感する言葉がけを心がけていった。
- ・口に入れないように保育者は必ず傍について見守るようにしていった。

4 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・水に触れる

ビニールプールに少量の水を入れて感触や温度を楽しんだ。スポンジやバケツなど様々な用具を使用して水に親しめるようにしていった。またスポンジに水を含んで絞ったりと水と感触を楽しんでいった。

- ・寒天ゼリー

寒天ゼリーに様々な色を使用して、色の変化や感触を楽しむ。

- ・氷遊び

夏に氷を触り冷たさや硬さの感触を楽しむ。また氷に色を付けて色の変化を楽しむ。

- ・片栗粉・小麦粉

強く握ると固くなり優しく触るとトロトロになるといった感触の変化を楽しむ。

- ・感触マット

足の裏の刺激を楽しむ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

- ・水に触れる

水を見ると興味を示して手を伸ばしたり、自ら触れて感触を確かめる姿が見られた。スポンジやバケツを使って水をすくったり流したりしながら遊びを広げる様子もあった。「つめたい」「じゃ～」と感じたことを言葉や表情で表現する姿も見られ。友達の様子を見て同じように触れてみようとする姿があった。保育者は「気持ちいいね」などと声をかけ、感触への気付きに共感しながら関わった。

- ・寒天ゼリー

寒天ゼリーの柔らかさに興味を示し、手でつまんだり握ったりしながら感触を確かめる姿が見られた。色の違いにも気づき「あか!」「きれい!」などと言葉にしたり、じっと見つめたりする様子があった。保育者は、「ぶるぶるだね」「赤い色だね」などと声をかけ、子どもの気付きや発見に寄り添いながら関わった。

- ・氷遊び

氷に触れると驚いた表情を見せながらも、繰り返し触れて冷たさや硬さを確認する姿が見られた。「冷たい」「かたい」など感じたことを言葉で表現する子もいた。色のついた氷をみて興味をもち、手に取って眺めたり友だちや保育者にみせたりする様子も見られた。

・片栗粉・小麦粉

片栗粉や小麦粉に触れ、手で握ったり指で触れたりしながら感触の変化を楽しむ姿がみられた。強く握ると固くなり、優しく触ると柔らかくなる様子に興味を示し、繰り返し試す様子も見られた。保育者は「ぎゅっとするとどうなるかな」などと声掛けをし、子どもが自ら試す姿を見守りながら関わった。

・感触マット

感触マットの上を歩いたり足で踏んだりしながら、足裏で様々な感触を確かめる姿がみられた。はじめは戸惑う様子もあったが、友だちが歩く姿を見て興味を持ち、後に続いて歩こうとする姿もあった。「気持ちいいね」「ちくちくするね」などと声をかけながら感触を共有していった。



5 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

今回の「感覚・感触」の活動を通して、子どもたちは実際に触れることで素材の違いに気づき、それぞれの感じ方を楽しんでいる様子が見られた。

はじめは慎重に触れていた子ども、保育者や友だちの様子を見て少しずつ手を伸ばし、自分から関わろうとする姿が見られたことが印象的だった。

また、「つめたい」「やわらかい」などの感覚を表情やしぐさ、言葉で表現する姿もみられ、感触遊びが五感の発達や表現力の育ちに繋がっていることを感じた。子どもによって心地良いと感じるものや苦手とするものが異なる為、一人ひとりの気持ちに寄り添いながら無理なく楽しめる環境づくりの大切さも改めて感じた。

今回の経験を通して、さまざまな素材に触れる機会を継続的に取り入れ、子どもたちの豊かな感覚の育ちを支えていきたいと感じた。